

## 第3章 自己の生き方を内省する

### 第1節 自己の生き方を語り合う全体学習

#### 1 自らを語る営み

1990年4月、板野中学校に赴任したとき、10名近くの地区出身の生徒たちがいる学級で、私は、初めて出会った生徒たちに、私自身の精一杯の思いを伝えた。それは共に頑張ってきた仲間が、決して仲間を差別したり差別されたり、踏みつけたり踏みつけられることがない、お互いがお互いの存在をかけがえのないものとして、信頼し尊敬していくつながりをつくり続けてほしいというメッセージだった。

私は大きな被差別部落に生まれた。中学時代はクラスの半数が部落の仲間だった。中学時代は部落差別の厳しさを実感することもなく、学校生活の中に私なりの勢いがあった。柔道をやっており、中学2年、3年と徳島県の大会で優勝して全国大会に出場することができた。その仲間の結束力は本当に強かったし、そのときのつながりは、今も私自身を励まし支えている。

そんな中で意気揚々と進学した高校で、私は中学時代の人間関係と全く違うものを実感する。40人のクラスの中で同じ中学校から来た生徒が7名いたが、その中で解放奨学金を受けていたのは私だけだった。その奨学金のことに関わって、クラスの中から1人、同和教育主事の先生からクラスの仲間にわからないように呼ばれることがあったが、それはとても恥ずかしいことであるような気持ちになっていたことを思い出す。

クラスの中でも、同じ中学校から来た生徒は、私が同和地区の生徒であることを知っているが、他の中学校から来た生徒は私を同和地区の生徒ということは知らない。1年間に何度か行われる部落問題のロングホームの中で、同じ中学校から来た生徒は私に気を遣いながら発言をする。また、他の中学校から来た生徒は、このクラスの中に同和地区の子はないという意識の中で発言を繰り返す。その中で私は、空気のように扱われている自分を自覚する。

地区外の生徒にしたら差別しているという意識は全くない。そのことはよくわかる。しかし、部落の人間を下に見ている意識、部落の人に対する同情や憐みをかけるかのような言葉が私にはビンビン響く。これは同和地区でない人間にはどうってことないことだろうが、当時の私にはその言葉が突き刺さってくる。そういう会話や私自身をイライラさせる雰囲気の中で、私はじっと自分を押し殺してきた。

また、私の出身の中学校から来ている同和地区外の生徒が、自分を同和地区の人間でないことを他の中学校から来ている生徒に示すために、「私の町のここが部落よ」とか「あの子が部落の子よ」という会話もささやかれていく現実がある。これは同和地区の生徒には聞こえないところで繰り返されている会話である。

単に部落問題に対する知識を教えていくという域を出ない、それぞれの出身中学校での同和教育が、高校で初めて出会う同和地区の生徒に対する特別な意識を生んでいく現実は今もある。同和教育が中途半端に行われていくと差別のばらまきになっていくのである。

そんな現実を打ち破っていくために、同じ中学校で共に人間として生きる「よろこび」をつかん

でいくために学んできた生徒同士が、決して差別したり差別されたりする関係であってほしくない。お互いの存在を大切に守り、共に人間として輝いていく関係であってほしいというのが、板野中学校に赴任したとき、初めて出会った生徒たちに語った言葉だった。この言葉は出会ったばかりの生徒たちの中に、様々な思いを広げていくことになる。

学級開きの語りを身体全体で受け止めていたY子が、その日の生活ノートにその思いを綴つてきだ。

【先生の話、先生が私たちに思いを込めて語ってくれた言葉が、心の中で今も渦巻いています。先生は「友だちを絶対裏切るような人間になるな」と話してくれたけど、私は友だちを裏切ってきました。私が通っていたM小学校には同和地区があります。

私は板野中学校に入学してきたとき、N小学校から来た子とすごく仲良くなりました。その子はすごく良い子なんだけど、私たち、M小学校から来た子に特別な気持ちを持っていたと思います。あるとき「Y子ちゃんって、同和地区？」と聞かれたことがあったんです。

私はそのとき、同和地区の子と勘違いされたくないから、「違うよ」と言いました。それだけじゃなくて、そのことをはっきり示すために「○○ちゃんがそう」「○○ちゃんもそう」と言ったんです。そのときその子は「○○ちゃんがそうなん。そんなふうに見えんなあ」と言いました。

私は今日の先生の話と全然違うことをしてきました。小学校の時、仲間づくりで頑張ってきた友だちを裏切ってきました。】

板野中学校に赴任したばかりの私に、この生活ノートは本当にショックだった。頭の中で生徒たちを取り巻く部落差別の現実はイメージしていたが、まさしく板野中学校の生徒たちはその真っ直中にいることを実感する。この生活ノートは、同和教育のあり方やその重要性を私自身に痛感させた生活ノートになっていく。そして、この生活ノートを当時、同じ学年の学級担任の先生方に提起し、その答えをみんなで出そうとしたのが全体学習の取り組みであった。

## 2 部落問題の授業をしているときが一番つらい

「今」「ここ」で、差別したり、差別されたりという状況にあり、その中で揺れながら学校生活を送っている生徒たちの「心に届く授業をみんなでつくろう」ということを確認し合ったとき、いろんな先生方の本音が心に届いてくる。

「私は、○○という教科の教員になるために、採用試験の学習を頑張ってきた。教員となり担任を持つようになったとき、年に何回か部落問題の授業をすることになったが、私がしてきた授業は部落差別の事実を伝えてきただけのように思う。」

私の授業を受けた子どもたちの中に何が残ったのかと考えると、自分は部落でなくてよかったということだけのような気がする。口では『差別はいけない』というが、ただ単に言葉を教えてきただけで、その心を搖さぶることはなかったと思う。」

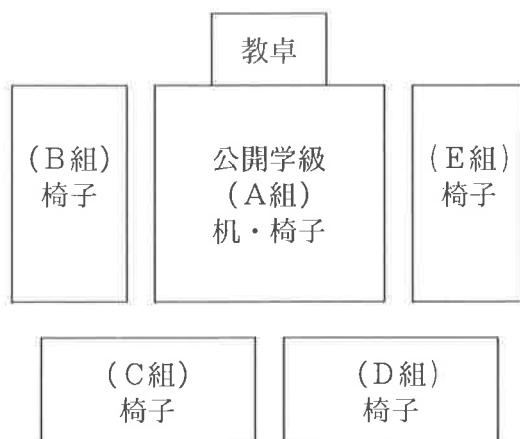
これは多くの教師のまさに本音の部分である。教師も生徒も本気で差別解消の主体者として生きしていく、そんな生き方を共に創造していく授業実践…。口で言うのはたやすいが、なかなかそのよ

うな状況には至らない現実がある。しかし、今、何かをしなければ、何も変わらないというのが、当時の教師集団が出した結論であった。そして、まず、教師自らが頑張らざるを得ない状況に自分自身を置こうというというのが、全体学習という発想になっていくのである。

### 全体学習とは…

一つの学級の学習を学年の生徒・教師全員が参観し(公開討論)、引き続いてその学習内容や主題について学年全体で討論を行う(学年討論)。この2時間連続して体育館で行う学習(社会科人権学習等)を全体学習と呼ぶ。

くたとえば筆者の勤務校である板野中学校では、木曜日5・6校時(総合的学習の時間)を設定し、全学級が年間1回は公開討論を実施している。>



1990年5月25日、当時の私のクラス2年B組が、教室をそっくりそのまま体育館に移動した形で、他の4クラスに人権・部落問題学習を公開した。どのような授業になるのかという不安もあった。しかし、「歩かなければ道はできない。まず私が…」という気負いもあったが、その授業を自分なりに楽しんだのも事実である。そして、その授業について学年全体で語り合う時間をとった。そのときは、まだ単に感想を述べるというだけであったが、その授業が大きな第一歩となったことは紛れもない事実である。

その授業を受けて、学年主任で2年C組を担任していた仁木真之先生が、6月10日に公開討論を実施した。その授業では、1回目のような硬さはもうない。そして、B組、C組の公開討論が他のクラスに大きな刺激を与えていくことになる。

まだ一部の生徒ではあるが、何人かの生徒が「先生、次はどのクラスが授業をするの?」と問い合わせてくる。やがて、どのような生徒たちの問いかけや訴えが段々と教師一人一人を本気にさせていく。そして、この授業はいつしか全クラスが1回は公開討論を実施するという既成事実が生まれてくるのである。

いわば一部の生徒の勢いに押され、ノルマの域を出ない状態で全体学習は積み上げられていくが、12月13日に実施された4回目の全体学習の時、学年全体での授業内容が大きく変わっていく。その授業は2年D組が公開討論を行うようになっていた。この時の資料は、土方鉄先生が著された『被差別部落のたたかい』という著書の中にある『私の目をみて!』という資料だった。

この資料は、生徒一人一人、特に被差別部落の生徒たちの生き方を鋭く問うことになる。特に、自分を安全なところにおいて発言を繰り返してきた生徒にとって、この資料はごまかしがきかない、きれいな言葉で自分を繕うことができない懸念を抱いていく。

この公開討論を実施した2年D組には、K子という被差別部落出身の生徒がいた。クラスのリーダーとして、それまでの授業の中心にいた生徒だった。K子が毎日提出する生活ノートの中に手紙

を書いてきた。

その手紙は生活ノートの中に書いてあるものではなく、便箋にその思いを綴り、その手紙の書き始めに「2年の先生へ」と書かれていた。その手紙の内容は、自分の思いを2年の先生方に受けとめてほしいという文章だった。

その手紙を私はK子の担任から見せられるのだが、そこには次のような思いが綴られていた。

【先生、私、すごく部落問題の授業をしているときが一番つらい思いをします。クラスの全員が私の方を見ているような気がします。

また、思うことなんだけど、みんなの心の中では「部落出身でなかってよかった」と思っていると思います。私だって中学1年のときは他人事のように思っていました。

でも、いざ自分が部落出身だと気づいたとき、とても悲しかった。そして、とてもつらくて心の中では、これから隠していこうと思いました。

これが差別意識なんですよね。私みたいに考えている子がいるから差別がなくならないんです。】

私はこの手紙の文面が、私の心に重くのしかかった状態で、この日の全体学習に入っていた。2年D組の公開討論、K子は資料『私の目をみて！』に寄せて、健気にも繰り返し繰り返し発言する。私はK子が発言するたびに「K子、お前が言いたいことはそんなことでないだろう。もっと言いたいことがあるだろう」とつぶやきながら、K子の発言をじっと聞いていた。

そして、次の時間、学年全体で部落問題に寄せる思いを深めていく授業、学年討論に入っていた。その授業は私がすすめた。4回目ということと、資料が生徒の人間としての生き方を揺さぶり、今までの全体学習以上に、生徒一人一人の部落問題に寄せる本音の部分が次から次に語られていく。その発言を聞く度、K子の肩が何度も何度も揺れる。

手を挙げようとするがなかなか手が挙がらないという感じであった。私はK子の肩が揺れるたびに、私の身体にも力が入っていく。

あと数分で学年討論が終わるところで、K子が手を挙げた。私は息を呑んだ。そして、K子を指名した。K子はすぐるようなまなざしをこちらに向け語り出す。

「差別があることを教えて…」と語り出すが、こみ上げてくるものを押さえきれず、言葉は消えていく。しばらくの沈黙の後、K子は「こんなこと言ったら怒られるかもしれないけど」と思いを伝えようとするが、その後は全く言葉にならない。言葉がない。涙があふれてくる。それでもK子は言葉を絞り出すように続けた。

「みんなは部落でないから、いろんなことが言えるんだと思う。私も自分がそうでないと思っていたときは、いろんなことが言えたけど、自分が部落出身だとわかってから、苦しくなって、自分が言えなくなってきた。」

K子は必死に溢れるものをこらえて言葉をつなげていき、その発言は涙で消えながらも、自分の思いを語り切った。この学年討論の最後の発言となったこの言葉、この発言はK子の学年全体への訴えであり、教師一人一人への突きつけだった。

私は、私自身が一番しんどいところに立たなければと思った。そして、必死に言葉をつないだ。「先生に言わせてくれるか。今のKさんの心の声をみんなはどのように聞いたのか。本当の仲間に

なっていく、そんな部落問題の勉強をしていきたいと思う。人間は、人のこと、遠くのことに対する美しくいられる。美しい言葉をならべることもできる。

でも、近くの出来事や自分自身の問題になってくると、あれほど美しかった人が、あれほど美しい言葉をならべた人が、見事に差別者になっていき、みにくさをさらけ出していく。そんな悲しい現実がいっぱいある。

私たちは、それぞれが持っている本当の思いを出し合える集団でありたいし、関係でありたい。そして、そんな教室や学年をつくっていきたい。お互いがお互いを大事にし合いながら、共に励まし、支え合いながら生きていく絆で結ばれ、この問題を自分自身の生き方の問題として捉え、許さない、許せないんだという生き方を確かなものにしていきたいと思う。

涙を流す仲間がいない、本当に今日も学校へきてよかったと思える教室でありたい。そのために、自分はこの問題に関わってどう生きるのかを問いかながら、みんなでこの部落問題の学習を深めていけたらと思う。1月にE組が授業を公開してくれる。E組の仲間と共に、みんなで本当の部落問題の学習ができたらなあと思う。」

私の精一杯の言葉だった。私はそのとき心の底から、私が一番しんどいところに立たないで、私が心の底にある本当の思いを生徒たちに語っていかないで、どうしてK子を始めとする部落差別の内で揺れている生徒たちが、頑張っていけるだろうかと思った。

私はその翌日、その「全体学習」を受けて、クラスの生徒たちに、わが生い立ちや部落との出会い。そして、もう絶対故郷には帰ってこないという思いで、県外の大学へ進学した私自身の生きざまを語つていった。

そして、大学へ進学した京都にも部落差別があり、様々な差別事象を目の当たりにしながら、必死に自分をごまかし続け、その中で自分の中に卑屈なものがいっぱいいたまり、何とかこのことから解放されたいと願い、故郷へ帰ってきたことを語っていく。

しかし、それでも頑張りきれなかった自分があり、結婚するときに揺れに揺れ、仲間の支えやつながりの中で歩き続けてきた自分自身に思いっきり吐き出していった。

そんな私の思いに重ねて、生徒の思いがとつとつと語られていくが、私の教育の原点はこの授業の中にあると言える。私自身の精一杯の思いをぶつけた授業記録と資料『私の目をみて！』を掲載させていただくことにする。



全体学習のようす

## 【授業記録】1990年度第2学年第4回全体学習・翌日の授業

主　題 「真実に生きる」

資　料 『私の目をみて!』(土方 鉄)

1990年12月14日(金)第3校時

徳島県 板野中学校 2年B組

授業者 森 口 健 司

### 1 部落問題の話をしているときに、涙を私の前で初めて見せた

T1: 昨日、D組の公開授業の後、2年生全体で『私の目をみて!』についてのいろいろな意見や、部落問題学習についてのいろいろな考えを発表してもらったんですけど、私は今もあのときの感動で胸がいっぱいです。授業が終わった後、授業の最後に涙をこぼしてしまったKさんを取り囲んで何人かの女子が、それぞれの思いを語り合っている姿を私はじっと見ていましたんですけど、あのときみんなで部落問題を自分たちの問題として、真剣に考えていくこうとする集団ができつつあるなあという思いでいっぱいになりました。

私自身、この問題に関わる切ない思い出がいくつかあります。部落問題を学習するとき、部落問題に関わって傷のある人は、苦しくつらいという思いからスタートしていると思います。私も、父親や母親、祖父、祖母の差別の中を生きてきた思いがわかったとき、本当に口惜しいつらい思いになった思い出があります。特に私の祖父はとても厳しい人です。その祖父が私の前でただの一度だけです。部落問題の話をしているときに、涙を私の前で初めて見せました。もう80歳になりますけど、私はもう生涯祖父の涙を見ることがないと思います。その涙はまさしく部落差別に関わる口惜しい思い出、いくら頑張ってもどうにもならなかったことを思い出し、その歯がゆさ、口惜しさがこみ上げてきて、私の前で涙をこぼしました。

差別の現実は、今はなかなか見えにくくなっているけど、まだ解決していない厳しい現実があります。そのことをもっともっと勉強していくんです。この問題を勉強していくことは、部落の人間にとて苦しいです。自分自身の傷をせせくられるようで、つらい気持ちになっていきます。みんなの友だちの一人が書いた文章にこんな一節があります。「先生、私は部落問題の勉強をしているときが一番つらい気持ちになってしまいます」と記しています。同和地区に生まれた仲間の中には、こんな気持ちでいる仲間が何人かいると思います。できるならば、このことについていつまでもふたをしておいてほしい。このことは本当につらいんです、このつらいことは考えずにいたいんだ。そんな気持ちでいる人も少なくないと思います。

でも、今も結婚の問題をはじめとする多くの差別がある以上、このまま放置できないんです。特に結婚に関わって、差別はいけないといっていた人が、結婚の問題だけは違うんだといって、見事に差別者となっていく、そんな悲しい事実を私はたくさん知っているんです。そして、今もその問題に関わって心を痛めています。口惜しい思いをしています。私はそんな口惜しい思いをバネとして、差別を許さない学習に自分のすべてをぶつけていきます。4月からいろいろな資料を通して学習してきた。そして、昨日6時間目の学年全体からいろいろな意見が出た『私の目をみて!』の授業を振り返って、みんなの資料に寄せる思い、昨日みんなの腹の中にぐっと沸き起こったことをみんなに語ってほしいと思うんです。

丸岡忠雄さんの詩『ふるさと』の話をしたことがあります、私のことを部落の人間であると知っている人と、この部落問題の話をしていくことは、とても話がしやすいんです。でも、私のことを部落の人間だと知らない人と部落問題のことに話題がいったとき、いつ私が部落の人間であるということを切り出していくか、今も戸惑うことがあります。ふるさと、自分の生まれたところを語っていくということは、部落の人間にとてつらいです。なかなか言えないです。資料にえがかれた勝手もそうですね。勝手の自分の出身地が言えない気持ちをみんなはどう捉えてくれたか、そのことについてみんなが思うことがあつたら、最初に発表してください。

SN(女)勇気がたりなかったのかもしれません。でも、自分が部落出身であることを言うのに特別な勇気がいるのは、まわりが差別しているからで、差別がなければ出身地を言うのに勇気なんていらないはずだと思います。

T2：自分の生まれたところ、出身地を言うということはごくあたりまえに、自然に言えるものでなければならぬはずですね。勇気を出さなければ出身地が言えない、そのことがおかしいということですね。

MT(男)僕も、勝子さんが自分の気持ちや出身地が言えないのがおかしいのではなくて、言いたくても言えないくらい部落差別はきつくこわいものだと思います。いくら頑張っても差別はより厳しくエスカレートして、むやみに口に出すと、どんなつらい目に合うかもわからない、そのぐらいの差別がきつくて勇氣があってもなかなか言えないんだと思います。

T3：今の意見についてどうでしょうか。

## 2 言わせない部落差別の厳しさを私は感じる

YY(女)自分の出身地を言えないのは、すごくつらいことだし、言わせない部落差別の厳しさを私は感じます。

T4：言えないのではなく言わせない厳しさ、またこの問題を学習したときに部落の人たちを悲しく切ない思いにさせていく。何ですかねえ、それは人の愛を引き裂いたり、幸せを奪ったりする差別が胸はって自分の生まれ育った、自分にとって大切な場所すら言えないようにしているんですね。

MS(女)私も勝子が自分の出身地を言えなかっただけは、言おうとしてもまた言いたくても、言ってしまえば職場で差別されるかもしれないという気持ちもあつただろうし、同じ中学校の仲間もいなくて、一人になったつらさもあったからだと思います。

YK(女)「職場でどうたたかっていけば」と資料の最後のところで勝子さんが言っていたけど、私は勝子さんは勝子さんの思いを言っていかなければならないと思います。

T5：言わなければ解決していかないということ、それと言えないということが問題であるということ。あとどうですか。

M0(女)Kさんと同じで私は言うことによって、みんなわかってくれると思います。

KK(男)僕もみんなに訴えていくことによってわかってくれると思います。

SN(女)けど、私は愛子さんに勝子さんが言ったときに愛子さんはわかってくれなくて、表面的に差別はないでしょうとごまかしたように、言ってもわからない人は多くいると思います。だから、なかなか言えるものではないと思います。

JK(男)言いにくいことだけど、わかってもらうためにはまず言っていかなければならぬと思います。

KN(男)僕も出身地が言えないのが悪いのではなくて、言えないようにしているまわりの人たちが悪いんだと思います。

SH(男)勝子さんは言つたらいじめられる差別されるということを知っているからこそ、なかなか言えないんだと思います。

MM(女)私も、出身地を言つてしまったら、差別されるかもしれないから言えないんだと思います。

T6：言わないのではなくて言えない。差別があるから言えない。しかし、愛子さんとのやり取りの中で勝子は語った、必死に訴えた。この勝子の気持ちを考えてみたい。訴えた勝子についてみんなが思うことを発表してください。

MT(男)愛子は、自分が差別していてもしていることに気づいていない。多くの人が差別に苦しんでいるのに、苦しんでいることすらわからない愛子に、勝子は腹が立ったんだと思います。そして、愛子に差別されている人は本当にこわいのか、差別している人は本当にこわくないのか、そのことをわかってほしいという気持

ちが勝子を必死にしていったんだと思います。

SN(女) T君と同じような意見なんだけど、愛子さんにちゃんと自分たちの本当のことをわかってほしいと思ったからこそ、必死に訴えたんだと思います。

MK(男)勝子は我慢できなくなったんだと思います。しかし、感情が高ぶっていても、出身地を言うのはすごく勇気がいることなんだと思います。

MT(女) 勝子が本当のことを語ったとき、勝子は偉いなあとと思いました。私だったらどんな状況になっても、差別されるのがこわくて出身地を隠していくと思います。勝子さんはすごいです。

YY(女)やっぱり勝子は、愛子さんに出身地を語るのにすごい勇気がいったと思います。それで、もし私が勝子さんの立場ならこれから差別を受けるとわかっていても、必死に自分のことをわかってもらおうと打ち明けたと思います。

NN(女)愛子さんに向かって勝子さんが訴えている姿に感動します。私にはできないと思います。でも勝子さんが頑張っているようすを見て、私も頑張らなければと思います。

MF(男)勝子さんは、愛子さんが言っていることは間違っているということを心からわかってほしかったと思います。

MN(女)私も、自分たち部落の人間と同じ人間とわかってほしいという気持ちから勝子さんは訴えたんだと思います。

TK(女)私も、本当のことをわかってほしいから必死に訴えたんだと思います。

T7：同じように「うん、うん」と相槌を打つたら隠せるんですね。でも隠さない、その行為について、その姿についてどう思いますか。

3 勉強していたから、部落問題に対して相手にわかる力があった

MM(男)たくさん勉強していたから、部落問題に対して相手にわからせる力があったし、本当の勇気が育つていたから隠さず、本当の気持ちが言えたんだと思います。

T8：たくさん勉強していたとはどういうことですか。

MM(男)やっぱり部落差別の厳しさや部落問題とは、どういうものであるかを中学時代に山嵐学級の仲間と、自分の生き方としてしっかり勉強していたということです。

T9：たくさん勉強していたから、自分をごまかすことなく言えたというM君の意見についてどうですか。

SN(女)やっぱり、初め出身地が言えなかつたのは、勉強していくても中学時代の勉強があまり役に立つていなかつたと思います。だけど、愛子さんがあまりにもひどいことを言うので、段々と腹が立つて本当のことをわかつてほしくていつたんだと思います。

T10：腹が立った、その腹立ちとは何だろうか。

MM(女) 部落のことで本当のことがわかっていないのに、部落の人を差別していくことにわき起こってきた怒りだと思います。

T11：差別していく人を許せない。そのままにしておけないという怒りや腹立ち、それが勝子に勇気を与えていったということですか。他に意見ないですか。

KN(男)やっぱり、いつまでも自分の心の中に隠していては、本当にわかってもらえないし、何にもよくなつていかないということがわかつていったから、はっきり訴えていくことができたんだと思います。

HM(男)僕は勝子さんは、もうこれ以上自分みたいに差別される人をこの工場内でつくりたくないという思いがあつたから、自分のことを語り訴えることができたんだと思います。

4 流されていくのか、その場の雰囲気が壊れようが間違いを指摘していくことができるのか

T12：私自身、こんな場面を経験したことが何度もあります。私を部落の人間と知らず、私の前でこんなことがよく言えるなあと思うくらい、部落の悪口を言う。そんな場面を教師になってからも何度か経験してきました。昨年もありました。

あるお宅へ用事があつて行ったとき、偶然その家にきていた近所のおじさんと話をするようになりました。そのおじさん、ある話から私に突っかかってきました。私を部落の人間とは夢にも思わなかつたんでしょう。こんなことを口にされました。「学校で同和教育やしいまわるけん、部落の人間がつけあがるんじや。今は差別は逆じや、わしらが差別されよんじや、部落の人間に問題がある、部落の人間が悪いんじや」そんな言葉が、私に向かって飛んできました。

20分ぐらい静かに聞いていました。悲しくなつて、やがて震えるぐらい腹が立つてきました。腹が立つて涙が出そうになりました。この資料と同じですね。私が人間として部落問題解決に情熱を燃やす教師として、本物かどうかが問われている、そう思いました。静かに語っていました。おじさん、それは違うよ、私は部落に生まれたけど、こう生きてきた。私の親は、私の家族は、私に頑張って生き抜いてくれという祈るような様々な願いや思いを託して、私を育ててくれた。私の部落の多くの仲間が、今いろんな苦しみを嘗めながらも前向きに一生懸命生きてている。私の胸の中にこみ上げてくるいろいろな話を、本当に穏やかに静かに、しかし、はっきりと語っていました。

そして、最後にこんな話をしました。部落の中にも悪いことをする人がおるかもしれん、でも、部落でない人の中にも悪いことをする人がおるでしょう。それなのに、部落の人間が一人悪いことをしたら、部落全体が悪いときめつけていく。でも、部落でない人が悪いことをしたときは、その家だけのことであり、その人、個人のこととして納得していく。一人の部落の人間の問題を部落すべての問題としてすり替えていき差別している。そのことをわかってほしいんです。そんないろいろな話を2時間程続け、わかってくれたかなあ、どうかなあという思いの中で、その日は別れました。

1週間ぐらいしてから連絡がありました。その家人を通じて、またいつか逢いたい、話がしたいと連絡がありました。2ヶ月ぐらいたって、同じ家で逢いました。初めて会ったときとは別人のように穏やかな顔で私に挨拶をしてくれました。その日、しみじみとお前と話ができるよかったですと語ってくれました。そんな場面がこれからのみんなの人生の中で数限りなくありますよ。私は部落に生まれた、私は部落に生まれなかつた、立場は違うかもわからないけど、相槌を打つて流されていくのか、その場の雰囲気が壊れるようがしっかりと間違を指摘していくことができるのか。そんな人間としての値打ちが問われる場面がいっぱいあると思うんです。

学校もそうですよ。だれかを痛めつけて仲間外れにして、仲良しになっていくことができる、そんな集団があったら、それはおかしいんですよ。おかしいことがおかしいと言える勇気がいると思うんです。勝子の勇気をもううて、私たちは生きていかなあかんと思うんです。そして、勝子は愛子とのやり取りの中で「私の目をみて！」と言つた。その眼には涙です。涙を流しながらも「私の目をみて！」と言つた勝子の勇気、「私の目をみて！」という言葉からみんなはどんなことを思いますか。

SN(女)目の前のこと、部落問題に目をそらさないで真剣に考えてほしいという思いが、「私の目をみて」という言葉になったんだと思います。

Y0(女)どれだけ自分が真剣に言っているのか、わかってほしかつたんだと思います。

NI(女)本当に差別がないのか、どうかということをわかってほしかつたんだと思います。

YT(女)差別の悲しみをわかってほしかつたと思います。

MT(男)「私の目をみて！」という言葉には、私もあなたと同じ心を持っている、それなのにどうして差別されなければならないのかという気持ちが込められていると思います。

SI(男)勝子は愛子に自分の本当の気持ちをわかってほしい。それが「私の目をみて！」という言葉になったんだと思います。

MM(男)T君が言ったように差別される人間の口惜しさや悲しさを心からわかってほしいという気持ちがあつたと思います。

AK(男)勝子自身も絶対差別から逃げないという決意が、この「私の目をみて！」という言葉に込められていて、これからは差別とたたかい続けていくと訴えていると思います。

KN(男)僕もT君の意見に似ていて、部落の人を差別しているのは、絶対に間違っているということを心からわかってほしかったんだと思います。

JN(女)愛子に差別する心をなくしてほしいという願いが、「私の目をみて！本当のことをわかって…」という言葉になったんだと思います。

## 5 祝福を受ける結婚なんてできないだろうとあきらめていた

T13：でも、勝子が生きていく職場というのは厳しいですね。昨日の授業の中で、C組のIさんが話をしたこと、Sさんが後半語ってくれたこと。『私の目をみて！』を今回勉強したこと、部落問題を学ぶということは何なんだろうか。どんな意味があるんだろうか。この中にも、「先生、この勉強するんほんまにつらい」という人がいると思います。また、「この勉強は必死になってやらないかん」という気持ちになっている人もいると思います。

部落問題を学ぶということは何なんだろうか。どんな意味があるんだろうか。重苦しいつらい気持ち、ほつといたら、そつとしといたら自然となくなっていくんじゃないんという気持ち。私にもそんな気持ちがかつてなかつたとは言えません。でも、この学習を深めていく中で、それは違うんだ、わが生命の営みとして、自分の生きていく使命として、この問題に必死に取り組んでいくんだという思いが生まれてきて、私は毎年、年がかかるときに新しい年の手帳に一つの詩を書き続けているんです。その詩と出会つてもう6年ぐらゐになります。

詩を書き込んだ手帳のその部分は、今までたつた一人しか見せていません。その詩を見せたのは、私の妻だけです。私は彼女と結婚するとき大変苦労しました。私も苦労したけど、私以上に悩み苦しみ、様々な思いを嘆みしめていたのが、私の妻だったと思います。私は、結婚を決意した最初の頃、彼女の苦しみがわかりませんでした。彼女は私が部落の人間であるということで、彼女を取り巻く人々に私との交際を厳しく反対されていたんです。私自身も、二人で結婚を決めた頃は、多くの仲間に集まつてもらって祝福を受ける結婚なんてできないだろうとあきらめていたんです。私のそんな思い以上に妻は、そんな思いが強かったと思います。

彼女が、私との交際を反対されていて苦しんでいた頃、彼女は、私自身の口から私自身のこと、私が部落の人間としてどのように生きていくこうとしているのかということを、はっきり聞いて共に頑張っていきたいという思いが強かったんでしょう。確かに結婚する1年前だったと思います。彼女は何かを言いたそうなのに言えない、本当につらそうな表情で急に黙り込んでしまいました。私がこのことかと、私が部落の人間であることを話し出すと、彼女は静かにうなずきました。そのとき、私はその手帳を出して、その詩を見せました。私はこれを支えとしてこの問題の解決のために頑張って生きていく。そんな話をしました。その手帳のその詩を見せたのは、そのとき一回きり、彼女一人きりです。

その詩は、『よろこび』という西口敏夫という先生が書かれた詩です。

部落で生まれ、  
部落で育ち、  
部落でくらし、  
運動と教育にいのちをかけて六十年。  
　　或るときは、烈火の叫びとなり、  
　　或るときは、草にすだく虫の声となり、  
　　或るときは、鋭く差別の事実に迫り、  
　　或るときは、静かに差別の矛盾を訴えた。  
このみちは、きびしい荊の道なれど、  
この道はわが生涯のつとめなり。  
　　ゆくさきは、幾多迫害ありとても、  
　　この嘗みは、わが終生の、運命なり。  
しかし、この嘗みは、  
わが生命の生きがいにして、  
わが生命のよろこびなり。

T14：部落差別を解消していく嘗み、それは人間として生きるよろこびなんだという、私の生涯の宝物である詩を見せた思い出があります。この問題を勉強していくということは、どんな意味があるのか、たとえば学習会がある。どうして学習会があるんだろうと悩んでいる人もいるでしょう。この問題に関わって、今みんなが思っていることを今日の授業の最後に発表してほしいと思うんです。

## 6 学習会、Yちゃんは来んでいいけんといって、先生に帰されたことがあった

YK(女)今、先生が学習会について話を出してくれたけど、私は学習会についておかしいと思っています。小学校のとき、友だちについて学習会にいったとき、私はあのときはいっしょに勉強しようという気持ちでついていったのに、Yちゃんは来んでいいけんといって、先生に帰されたことがあったので、私はおかしいと思い続けています。

T15：学習会は、先生が中学2年のときに県下の同和地区のある学校のほとんどで実施されるようになったんです。学習会の大きな願いの一つは、部落の子どもにしっかりと部落問題の勉強をさせていくということなんです。私も、中学当時、学習会場で部落はなぜつくられ、どのように差別が残されたかということを学び、自分は部落に生まれた人間としてどのように生きていくかということを部落の仲間と共に語り合った思い出があります。学習会は差別の中を生きていかなければならぬ部落の子どもたちに、部落の人間として、どのように生きていくかという自覚を持たせ、部落の仲間がつながり結び付いていく、そして、共に励まし合いながら生きていくという話し合いをする場であると思うんです。

それともう一つの願いは部落の生徒に学力をつけるということです。学習会ができる前より、社会には部落差別が厳しく存在し、部落の進学率は、徳島県全体の進学率と比較して、20～30%ひらいていたんです。そして、今もまだ8～10%のひらきがあるんです。その差がなかなか縮まらない。それは差別があるからなんです。そんな二つの願いを持って学習会が実施されています。部落の子どもたちが中心になって、部落問題を解決するために学習会があるということをわかってほしいんです。この学習会に関わって何か意見があつたらお願ひします。

## 7 部落差別を受けた部落の人たちしか、部落差別を受ける気持ちというのはわからんと思うから

YY(女)私自身、小学校の低学年の頃から学習会を行っていたんだけど、自分自身が部落に生まれたということを知らんかって、しんだいなあというだらけた気持ちで行っていたとき、あるとき先生が「あんたら、どうして学習会にきよるかわかるで?」と言われたので、私は軽い気持ちで「そんなん知らん」と答えた後、先生が「あんたらは部落に生まれたから学習会に行っているんですよ」というふうに言われたんです。でも、そのときは部落というのは、どんなものか知らんかったので、そのままなんとなくしかわからない状態だったんだけど、5年生のときに、また先生から「部落に生まれたことを誇りに思え」って言われたんです。でも、どうして誇りに思わないかんのか疑問に思いよって考えてきよったんだけど、最近思うようになったことは「部落以外の人は部落差別というのは受けたことがないと思うんです。部落差別を受けた部落の人たちしか、部落差別を受ける気持ちというのはわからんと思うから、その気持ちを自分のまわりのいろんな差別に対してぶつけて改善していかなあかん」という気持ちが自分にわいてきて、ほんま「ああ、学習会はすごい大事なものなんやなあと思うて、それから学習会という自分にとって大切な時間をおろそかにしてはいかんなあ」と思うようになりました。

T16: 今のYさんの意見について思うことを発表してくれる。

## 8 学習会は差別をなくすために近道というか、とても大切なところ

SN(女)私は今まで、学習会はないほうがいいと思っていたんです。私自身も差別意識があつて学習会を行っている子を見たら「ああ、この子も部落の子やなあ」と思って、学習会は部落の子と部落外の子を分けているようあまりいいことはないと思っていたけど、Yさんの話を聞いたら、学習会は差別をなくすために近道というか、とても大切なところなんだと思えてきました。

T17: 学習会が部落と部落外を分けていくのではなくて、学習会が学校の部落問題学習の核となって、より部落と部落外の思いと想いをつなぐ、連携を深めていく、部落差別をみんなでなくしていくんだという同和教育推進の中心に学習会が成立していかなければならぬと思うんです。他にどうですか。

JK(男)差別している人は、自分が部落に生まれたらどんな想いでいるかということを考え、差別を受けている人のつらさを一つでもわかつたら差別する心はなくなっていくと思います。

MS(女)私も学習会は、いろんな先生が学習会にいって差別に立ち向かって生きていくように、勉強していかんかと進めてくれるから、ほんとは心の中で行かないかんと思うけど、やっぱりどこかに差別があってなかなか行くことができん。

MM(女)私も、学習会に対しておかしいなあと思っています。小学校のときに私が学習会の会場に行ったら、先生に帰りなさいと言われて、どうしてきたらいかんのかなあと思っていたことがありました。でも、Yさんやみんなの話を聞いていると、今まで部落の子は自分とは違うんだという気持ちがどこかにあって差別をしていたと思います。

T18: 私は昨日始まったと思います。昨日の6時間目の全体学習から本当の同和教育が始まったと思うんです。本当の意味で、わが生命をかける教育は昨日始まった。決して許さないという、差別しないと言うだけではない、差別できないという想いをすべての人間の生き方にしていく、そのためにはこのことを徹底的に学んでいく。何が間違っているのかということを徹底的にわからせていく力、わからせていく営み。今していることで涙が出そうになる。それは差別があるから、このことがこの想いが胸張って話していく学校や学級や、そしてそういう社会をつくっていく。そのためにこの営みを続けていく。みんなは、私の大切な仲間なんです。何を求めていくか、もっともっといろんな話を続けていきたいし、みんなの想いをしっかりとまとめていきたいと思います。一生懸命に発表してくれたみんなにありがとうございます。私は絶対に負けない、生命をかけて生命終わるまでこの教育に頑張り続けます。終わります。

【資料】

## 私の目をみて！

駅から、バスにゆられていくと、やがて、たんぼのなかに、美しい工場の棟のたちならんでいるのが、目のなかいっぱいにとびこんできました。

〈あそこで、今日から、勝子の新しい生活がはじまるのや！あの工場の門のなかに、なにが勝子をまっているのか…〉生れてはじめて、あの川のある部落からはなれ、父母のところから巣立ってきた一羽の小鳥のような勝子は、期待に胸をふくらませています。しかし、そのふくらんだ胸のなかにも、かすな不安がよぎります。そこには、おそらく差別がまっているだろうからです。

こんどはクラスのなかまはないし、勝子はひとりぼっちです。

今朝、家をでるとき、母は、着がえなどをいれたボストンバッグをもって、市電の停留所まで送りにきてくれたけれど、父は、だまつたまましきいをまたぐ勝子の顔をみつめていたのです。あのときのあの父の顔が、勝子の目にうかんできます。市電に勝子がのりこむとき、ボストンバッグを手わたしてくれながら、

「勝子。気嫌ようして、みんなにかわいがってもらうのやで…」

といってくれた、あのときのあの母のかすれ声が、耳によみがえってきます。

勝子は、そのとき、鼻の奥がツンとなって泣けそうになったのです。勝子はそれをこらえ、心のなかで、（かあちゃん、おおきに。勝子はがんばるでエ…つよく生きぬくでエ！）と誓っていたのでした。

勝子といっしょに、この日、この織物工場の門をくぐった中卒生たちは、50人近くもいました。「新しく入社した皆さんに、全工場あげて期待しています」という、工場長さんの訓話をきいたあと、勝子たちは、寮に案内されました。寮は、廊下をまんなかにして、両側にアパートのように部屋が並んでいる2階建ての木造でした。一つの部屋に6人です。新入社員のものが、一人づつはいることになったのです。寮母さんから、「今度入社された勝子さんです。皆さん仲よくしてあげてくださいね」と紹介されて、勝子のはいった部屋には、もう30ぐらいの人が一人いて、との4人は、勝子より2つ3つ年かさの人たちでした。

部屋の人たちは、みな親切でした。押入のあいたところを使うようにといってくれます。そこには、会社から貸与される布団も一組入っていました。

「わからないことや、困ったことがあれば、いつでもいって下さいね。こうして一つ部屋でくらすことになったのですから、お互い助けあっていきましょうね。」

いちばん年かさの春江さんがいってくれます。一人一人、名前と出身地を自己紹介してくれました。春江さんは島根で、との人たちは、鳥取と香川の人が二人ずつでした。

「勝子さんは関西ですって…」

「はい。関西ゆうてもひろいでしょう。X市なんです」

「わあ、X市って観光地で有名なところやろ。私、修学旅行にいっただけ。X市のどのへん」

陽子という香川の人が、はしゃいでたずねました。

「名所の多い…そんな街のなかとちがうの…もうはずれの…つまらんところです」

どうして私は、あの川のある部落の地名をいわないのだろう。みんな遠くはなれた県の人たちだもの、わかるわけないのに…。山嵐先生おこるやろな。学校では、あれだけえらそうにいってきた私が、こうして、つい部落のことをかくそうとしてるんだもの。勝子、平氣でいえばいいじゃないの…、という勝子自身の声が、勝子をしかりつけている…。

しかし勝子はついにそのことをいいだせなかつたのです。

やがて、1ヶ月の養成期間が終りました。養成期間の間は、機械のつかい方の講義や、実習などがありました。はじめて工場へはいって、勝子はびっくりしてしまいました。養成係の男の工具さんから説明されても、なにをいっているのか、ぜんぜん聞えないのです。糸を巻いたコマがくるくるまわり、機械がカチャンガチャンとあがりさがりするにつれて、真白な布地がのびていくのです。

“さあ、私も、仕事らしい仕事ができるぞ！” 勝子の胸には闘志がわいてきました。

作業もだいぶ覚えられて、職場の人とも仲よしになってきた、ある日曜日のことでした。勝子が洗面所へいくと、いっしょに入社した隣の部屋の愛子さんがタオルで顔をぬぐっていました。「おはよう」をいいかわしたあと、彼女は声をひそめて、

「勝子ちゃん。この会社に部落の人、たくさんいてんのやって…」

と話しかけてきました。勝子の、いきおいよくうごいていたハブラシの手がぴたりととまってしまいました。どうどうきたのだ。私が、人間として値打のあるものであるかどうかが、ためされるときがきたのだ…。つめたいものが背すじを流れていきます。

「なに？ 部落って…」

勝子は、いっしょうけんめい、たかぶってくる感情をおさえながらいました。

「勝子ちゃん、知らんの」

「うん」

「平民の下のものやがな」

「ふうん。まだ平民ってあったのか…」

「よういうでしょう。部落って…まさか、あんたじゃないやろね」

勝子は、なんとかして笑顔をつくろうとしますが、どうしても顔がこわばってくるのです。

「…………」

「まさか、あんた…」

「もし…、もし、私がそうやつたら、どうするの」

勝子は決心しました。かくすることはないので。恥ずかしがることはないので。

「そんなことないでしょう」

「そうやつたらどうするの」

勝子の声は荒くなっています。感情のたかぶりをおさえようとしても、おさえきれないのです。

「そんなことない。そんなことないわ…。でも、もしそうだとしたら、ただの友人なら、なんともないけど…。それ以上はかなんわ」

「それ以上ってなんのこと」

「たとえば異性の人やつたら考えなおすわ」

「どうして？」

「どうしてって、こわいもの…」

「どうして、こわいの…」

「みんなが、そういっているもの…」

「それは、愛子ちゃんの先入観とちがうか…。(いうのだ、はつきりいうのだ)それが証拠に、この私がこわい」

「…………」

愛子の顔色が、かわってしまいました。とたんに真剣な表情になったのです。

「今まで、私とつきあって、こわいと思ったことあった」

「ううん…」

「部落というのはね、徳川時代にあった、あの士農工商という身分制度なのよ。この4つの身分よりまだ下とされてたのよ。幕府が、百姓町人を、牛のように働かせるために、上みてくらすな下みてくらせ、部落のこと思ったら、おまえらはまだといって、支配しやすいように、こさえたものよ。その人たちの子孫を未だに差別しているのよ。それはまちがっているのよ」

勝子は、だんだんおちついてきて、中学校でならったことをしゃべりつづけました。

「でも勝子ちゃん、今の時代にはもう差別はないでしょう」

愛子は、うつむきながらいました。

「あなた、いま異性なら考えなおすっていったじゃないの。それが差別の証拠よ」

「けど…あなたが、そんなとこの人って信じられないわ」

「じゃ、私の目を見て！」

勝子の目には涙がたまっていました。泣いてはいけない、そう思い、こらえようとするのですが、涙はあふれて、頬をつたっておちました。愛子は、ちらと勝子の眼をみあげましたが、すぐ目をふせてしまいました。

「私、あなたにいいたいの、あなたは部落のことをなんにも知らずに差別してるんだわ。私、今までも、別にかくしてたんじゃないのよ。いいだすチャンスがなかっただけ…。私きっと、あなたにわかってもらうわ。根くらべしてでも、わかってもらうわ。あなたがまちがっているってこと…、今日はこれだけにしどく、ハイキングにおくれるから…、さあ、愛子ちゃんもいそがなくっちゃ…」

そうはいったものの、こんな工場のなかで、どうたたかっていけばいいのか、勝子にはわかりませんでした。

部屋へ遊びにやってきた、2階にいる雅子さんが、陽子さんたちとしゃべっていましたが、「MさんとYさんが、そうやって…」などと情報を告げて、わいわいといったりします。それを聞くにつけても、もうじつとしておれません。1700人の従業員全体に対してどうたたかっただいいのでしょうか。

(被差別部落のたたかい・新泉社・土方 鉄)

### 3 自分自身の中にある差別意識に気づいていない

この授業のことは生涯忘れる事はない。この授業に寄せて綴られた生活ノートは、部落差別がすべての生徒たちの上にのしかかっている現実を私に突きつける。

【今日の授業、胸がいっぱいになって涙が出てきた。今までにない悲しさ、腹立ちがこみ上げてきました。こんなに真剣になれた授業は、本当に初めてでした。先生はすごいと思う。】

おじいちゃんと初めて部落問題について話をしました。K地区のHという地域が部落だそうです。実は私の住所はK字Hです。私はびっくりしました。そのとき「嫌だ！」って思いました。おじいちゃんから私の家は部落に入っていないって聞いたときは、ものすごくホッとした。それでハッとした。先生の話を聞いていると、涙が出て、腹が立ってくるのに、自分のこととなると嫌だって思うんです。ものすごく都合のいい心だなあと思いました。差別があることに気づかないのは、自分自身の中にある差別意識に気づいていないからだと思います。】

感動するが、自分のこととなると醜さをさらけ出す。この授業は地区の生徒にとっても、地区外の生徒にとっても、まさしく部落問題に関わる生き方そのものを問うものとなっている。

この授業から私自身のいろいろな取り組みや、全体学習そのものが大きく変わっていました。表面的な取り組みでしかなかった、差し障りのない取り組みでしかなかったものが、教師も生徒も両方がその生き方を問うものとして、今までの形骸化した取り組みを洗い出すように、全く違う授業内容、全く違う教育活動が次から次へと展開されていく。

特に、学年が2年から3年に上がったとき、学年全体で取り組むということが本当にすごいことであることを実感した。今までは5クラスがそれぞれに取り組んでおり、どうしてもクラス間での部落問題に対する意識の差が存在し、すごく高まったクラスと、もう一つ高まらなかつたクラスとの格差は大きなものがあり、学年が変わるたびに一番意識の低いところに焦点を合わせての学級づくりが始まり、同じことを繰り返すことになっていた。

その中で生徒たちは「また同和か」「また同じことか」という非常にしらけた思いにさせてきた。しかし、全体学習という取り組みを通して、みんなで考えてきた人権・部落問題学習をより確かなものにしていくとする意識が生徒一人一人の中に芽ばえており、新しい学級の新しいメンバーの中にあっても憶せず堂々とその思いを語り合う関係が成立していた。

この全体学習に取り組んできた2年生が、3年生になったことから、この取り組みを学校全体の取り組みにしていくことで、新学年早々の4月30日に、全校生徒を巻き込んだ全体学習を実施した。

そのときの公開討論は私のクラス3年B組（1991年度）が授業を行ったが、4月の家庭訪問などの慌ただしい中にあっても、しっかりと部落問題に寄せる思いを語り合う授業が成立する。そして、その授業が他の学年も巻き込んだ学校全体の人権・部落問題学習へと広がり、やがてそれが全学年が一丸と取り組んでいく全体学習になっていくのである。